セントラル
たなかでぼたもち

本院院長 井手口の独り言や、メディアで出会ったちょっとした情報を勝手にシェアする気まぐれ随想録

第5回　ふるさとを想ふ（2023/7/7）

僕は宮崎県延岡市に生まれました。体育教員の父母のもと4人兄弟の３番目。「兄弟」と書きましたが姉2人、妹1人に囲まれ男は僕1人です。日本語の「きょうだい」という言葉は不思議ですよね。「姉妹」という言葉もありますが、男が1人でもいると言葉では「きょうだい」と呼びます。一姫二太郎だと「姉弟」と書いて「きょうだい」なんて読ませたりもしますが、僕の家のように女・女・男・女なんて並びになると、口では「うちは4人きょうだいで…」と説明できるものの文字にすると困ってしまいます。実際は姉と妹がいるわけですから「4人姉妹」と書きたくなるものの、それでは「4人しまい」と読まれて男はいない感じになります。英語でもブラザーズやシスターズは聞いたことがありますが、男女が入り混じった「きょうだい関係」を表現する単語も存在するのでしょうか…？だいぶ話が逸れてしまいましたが、とりあえず6人家族の第3子、一応長男坊というところです。

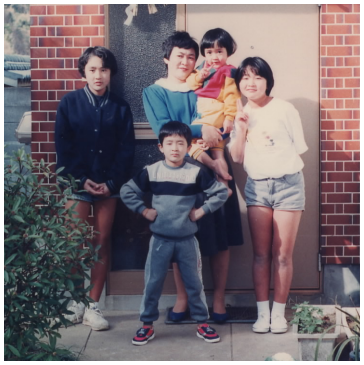
幼少期の記憶はほとんど残ってないのですが、男児が生まれて父が喜んだらしいこと、そんな父が一生懸命辞書を引いて「景（あきら）」という名前をつけてくれたこと、夏の縁側でカーテン越しにもたれ掛かった窓が開いていて、軒下のコンクリートに後頭部をぶつけ縫い傷ができたこと、その際帰宅した父に母が相当怒られたらしいこと、はしかに罹って水銀体温計が42℃まで振り切りトイレに行こうとしたら歩けず、おそらく仕事を休んで看病してくれていた父に支えられながら用を済ませたこと、今思い返すとまだまだ幼稚園児だったのに「この歳になって1人でトイレに行けないなんて情けないな」と思ったこと、週末は父のサッカーの試合について行き隣の公園で1人遊んでいたこと、親戚か母の友人が遊びに来た夜、先に寝ようとしたら母親にキスをせがまれ「人前で恥ずかしいなぁ」と思いながら「お休み。」と頬にキスしたこと、母親によく「横着だ」と叱られ「おうちゃく」という言葉を辞書で調べたこと…。記憶はほとんど残ってないと前置きしておきながら、書いていると断片的な記憶や何度か聞かされた話を思い出してきました。

姉たちとは5、6歳離れているので幼い頃はいろいろと可愛がってもらったのかもしれませんが、その頃の思い出よりも中高生の姉たちに叱られた記憶の方が残っています。きょうだいの中では3つ下の妹の方が一緒に過ごした感覚が強く、本当の記憶かわかりませんが生まれたての妹が居間で寝ていて、親たちがどんな名前にしようかと相談してる中「不思議だなぁ」「僕にも妹ができたんだ」みたいなことを考えながら小さな手足を触ってた気がします。そんな記憶もありながら、小学生くらいには付きまとう妹を煙たがったりもしてました。

僕が中学1年になる年、長女は大学に進学して富山へ、翌年二女は大分の大学へ、そして僕が全寮制の高校に進学した年に父も単身赴任となり、実家には母と中学1年の妹だけになりました。言葉にできない寂しさや思春期も重なったのか、後々聞いた話ではその頃の妹はだいぶ荒れてたそうです。そうやって考えると家族6人で過ごした時間は10年ほどしかなかったことになります。妹が沖縄へ進学した年僕は高知にいて、6人家族は6カ所で生活していました。そんな家族の形が稀有なのかどうかわかりません。当時は自分のことしか考えてなかったので、家族のそれぞれがどんな思いで暮らしてたのか想像すらしていませんでしたし、現在のようにスマホを取り出して気軽に近況報告なんてできませんでした。

高校3年間は2～3ヶ月に一度帰省する機会があったと思いますが、実質的に生まれ育った実家で暮らしてたのは15年です。宮崎のような田舎で生まれると、多くの人たちが高校卒業と同時に県外に出るため、実家暮らしは18年というのが平均的でしょうか。そこが自分は15年、さらに家族6人で過ごしたのは10年。幼い頃の記憶なんてほとんど残ってませんから、記憶に残る6人家族の生活は小学校時代の6年くらいしかなかったことになります。

その頃の記憶では学校から帰ると家には誰もいないというのが当たり前でした。今思うと姉たちも部活なんかで帰りが遅くなり始めた頃だったんだと思います。高学年になって僕のサッカーの試合があっても、週末も部活指導



などで忙しい父や母が応援に来れた機会というのはとても少なかったと思います。そんな時期を「寂しい」と思った自覚はあまりないのですが、いざ自分が家庭を持つと子ども達が小さいうちは可能な限り妻には家にいてもらいたい、「ただいま！」と帰ってきた子どもに「おかえり！」と返事のある家にしたいと思うようになりました。親の愛情が足りなかったとは思いませんし、両親が懸命に働いてくれたおかげでいろんなことにチャレンジする機会を与えてもらえたことも今は理解できます。ただもしかすると無意識下に、父や母にもっと近くにいてもらいたかったという執着があるのかもしれません。

妻はたくさん仕事をしたいという考えではなかったため、ありがたいことに子ども達と過ごす時間をしっかりと確保してくれており、今は保育関連のパート仕事をしながらも子育てに奮闘してくれています。何が正解ということではないのですが、今の自分が「可能な限り子ども達の近くにいたい」と考えてしまうのは、幼い頃の経験からくる想いなんだろうと思います。

両親は定年退職後に父が生まれた高鍋町というところに引越し、僕が生まれ育った場所には縁あって幼馴染が新居を構えています。なので現在里帰りするのは、同じ宮崎県ではあっても幼い頃の僕にとっては祖父母のいた町。帰郷しても友人に会うことはほぼありません。多くの友人たちは県外で生活してますし、県内に残る友人に会うにも遠出する必要があったり、そもそも筆無精の僕には関係を続けている友人がほとんどいません。それでも両親の新居ができて約15年、高鍋町のその家を「実家」と呼ぶことに違和感はなくなり、延岡市ではなく「宮崎」が故郷となり、さらに言えば両親がいる場所、それこそ父と母の存在そのものが故郷になっているんだと思います。

郷愁という言葉がありますが、確かに生まれ育った宮崎を想う時、あの頃眺めた海や山川、笑い合った友人達、町を包むのんびりとした時の流れ、温かみを感じる訛り言葉などなど、懐かしくて愛おしくて、胸の奥に不思議な安心感が湧いてきたりします。ただそこに両親の存在がなくなったらどうなるんでしょう？幼少期を過ごした郷土としての懐かしさは変わらないにしても、帰省しようとか里帰りしたいという気持ちは湧かないのかもしれません。将来父も母もいなくなって、実家もなくなった宮崎に数少ない友人を訪ねに行ったとして、それは里帰りではなく旅行になってしまうのかもしれません。胸の奥に湧く不思議な安心感というものは、父と母がいる宮崎だからこそなのかもしれません。

お陰様に、後期高齢者になる両親も今はまだ2人とも元気でいてくれて、きょうだい4人はバラバラに生活してますがそれぞれが家庭を持ち、子宝にも恵まれ、各々の土地で各々の人生を生きています。

普通のことかもしれませんが、なんとなく照れくささが残り父と直接話すことが多くありません（父がどう感じているのかはわかりません）。実家への連絡は基本的に母に電話しますし、連絡があるのも母からばかりです。父の影響でサッカーを始め、幼い頃はいろいろと遊んでもらったはずですが、昭和親父の「あるある」なのか、家ではあまり口を開かない父親だったと思います。高校生の頃僕の友人が泊まりにきた際の父を見て「この人こんなに喋るんだ」と驚いた記憶があります。サッカーの練習法を教えてもらったり、竹で弓矢を作ってくれたり、何度か釣りに連れて行ってもらったり、釣竿の先に虫取り網をつけて高いところの蝉を採れるようにしてくれたり、自宅のお金を盗んで思いっきりビンタされたり…。記憶を探るとそれなりにいろんなことを思い出しますが、何かこう普通の話をしたというか、何が好きで何が嫌いとか、父のことを直接聞いたりこちらの想いを話したりした記憶はありません。一度だけ高校生の頃、寮生活に寂しさを感じたのか、勉強や人間関係に疲れたのか、それまでに感じたことのない悩みというか壁にぶつかったことがあり、その時はなぜか父宛に手紙を書きました。どんなことを書いたのか全く覚えていませんが、父からの返事は言葉少なで、五木寛之の『大河の一滴』が添えられていました。本の内容は覚えていませんが「父らしい返事の仕方だな」と思った記憶があります（改めてまた本を読み返してみようと思います）。またこれも高校生の頃でしたが、中学で父に世話になったという同じ年の男の子と出会った際「井手口先生エロくて面白かったー」と言われ、家では寡黙な印象の父も、教員としては思春期の子ども達相手に面白おかしく授業してたんだなぁと人間味を感じたりしました。こんなことが息子の耳に届いてたなんて、父は思いも寄らないでしょうが。

そんな父は定年後に畑を作って家庭菜園をしたりゴルフにハマっているようですが、今なおサッカーを続けています。4年前にはシニアの全国大会が静岡で開催された折に家族で応援に行きました（この時も父からの連絡はなく、全国大会に父が出ると知ったのは幼馴染からの情報でした）。父のサッカーをしている姿を見るのは中学以来でしたが、この歳でも夢中になれるものがあり、仲間がいて懸命に勝利を目指す姿というのは、生意気にも感慨深く、見れてよかったと思いました。さらに年齢を重ねた最近は「声がかかったから遠征に同行したのに試合に出してもらえんかった」などと母に愚痴ったりしてるそうです（笑）。

母は何かと一言多いというか、そんな言い方しなくていいのに…と思うことがよくある印象です。僕だけでなく他のきょうだい達も、母と一緒に過ごす時間が長くなると苛立ちを募らせるというか、疲れてしまうのかなという感じです。思春期にそんな母と二人っきりになった妹は大変だったろうなと思うわけです。高知で一人暮らしを始めた頃、どんな内容だったのか覚えていませんが、母親と電話で口論のようになり、吐き捨てるように何か言われて電話をブチっと切られたことがありました。同じように親元を離れている状況とは言え、それまでの県内での寮生活とは違う寂しさ、慣れない土地での一人暮らしといった孤独感もあったのでしょう。言われた言葉に傷ついたとか怒りが湧いたではなく、こちらの声を聞かずに一方的に電話を切られたことがただただ悲しかったのです。おそらく、自分の想いや気持ちをうまく言葉にできないもどかしさがあって、ただでさえ何か伝えたいけどどう伝えたら良いのかわからない状況で、もう知らない！と切り捨てられた感覚が、とてつもない悲しさになったのだと思います。涙を堪えながらすぐに電話をかけ直し「苛立つ気持ちはわかるけど、そんな電話の切り方だけはしないでください。寂しすぎます」みたいなことを伝えて電話を切った覚えがあります。結局その後の人生でも、同じように電話を切られた記憶が１回くらいありますし、口論云々関係なく要件だけ伝えて取り付く島もなく電話を切られることが時々あります（笑）。僕にとっては痛烈に残るこんな記憶も、きっと母は覚えていないことでしょう。

全寮制の高校に進学したことにも母との関わりがあります。当時の母の勤め先は学区内の普通科高校だったため、そのまま進学すると同じ学校に通う予定でした。ちなみに長女はその状況で高校生活を過ごしています。中学生の頃、意地悪な友達に「うちのねーちゃんが、お前のかぁちゃんに怒られたってー」みたいなことを言われ、教員としての母が友人達や自分自身と「教師と生徒」として関わる状況は難しそうだな、なんか嫌だなと、思春期も影響して漠然とそんなことを考えていました。そんな折、中学3年の夏休みに卒業生が高校の紹介に来てくれて「全国初 公立の中高一貫校（自分たちの代が3期生で高校からの入学ができる最後の機会でした）」「自然に囲まれた環境で様々な体験を重視するカリキュラム」などの文言に惹かれ、学力的には厳しい状況でしたがその高校を受験することにしました。両親とも話し合い、母は「同じ学校が嫌なのであれば私が異動を希望することもできる」と言ってくれましたが、面白そうな学校だなという純粋な気持ちも大きくなっていたので寮生活を選びました。親の勤め先に通学することがどういうものだったか、長女には聞いたことがありませんが、寮生活を選んだ結果として親のありがたみを少し早い段階で知ることはできたのかなと思います（今思えばまだまだわかってなかったですが…）。

「一番好きなおふくろの味は？」と聞かれれば、迷いなく納豆巻きと答えます。梅やきゅうり、大葉や季節の漬物などを細かく刻んで納豆と混ぜ、酢飯を使って高菜の漬物で巻いたものです。高菜がなくなると海苔巻きになります。初めは輪切りにしたものを食べていましたが、あまりにたくさん食べるので、そのうち巻き寿司のままかぶりつくスタイルになりました。食べた後は喉が渇いて渇いて、お茶をがぶ飲みするのも定番です。帰省して「何を食べたい？」と聞かれる度に「納豆巻き！」としか答えない息子に、「小さい頃はいろんなものを食べさせたはずだけどなぁ。他にも美味しいものたくさんあるのになぁ。」と少しがっかりする母のようです。確かに、年齢を重ね帰省する度に食卓を飾るおふくろの味達、時には一緒に採りに行ったツクシやツワブキの炒め煮（宮崎では「煮しめ」と言います）などなど、母の味は母の言う通り、美味しいものがたくさんです。ちなみに二番目と聞かれればチキン南蛮！自家製タルタルソース付きで、これまた絶品です。

もともと絵を描くことが趣味だった母は、定年退職後に通信制度を利用して京都の大学に入学し日本画を専攻、結局大学院まで卒業しました。スクーリングの度に友人が増え、今なお同期生との絵画展なども行ってるようです。また、スマホを持ち始めた60代半ば頃からfacebookのアカウントを作り、そこから新たに仲間ができたりしています。実の子ども達がなんとなく感じているような付き合いづらさとは裏腹に、不思議といろんな方々に慕われる魅力も持ち合わせているようです。昔の教え子だった方にも何度かお目にかかりましたが、みなさん懐かしがりながら親しみをもって接してくれていました。

そんな母に言われたことで印象に残ってることが二つあります。一つは高校3年の頃、帰省した実家の居間でテレビを見ながらくつろいでたところ「ちゃんと勉強してるの？もっと努力しないと大学にいけないよ？」みたいなことを言われ、自分としては普段の寮生活で気を張って勉強してる分、たまに帰省した時くらいリラックスさせてくれという気持ちで「ちゃんとやってる。努力してる。」と言い返しました。すると『努力というのは自分で「してる」と言うものではない。他人から見て「あの人は努力してる」と評価してもうらうもの』と言われたのです。当時は「自分なりにがんばってるんだから、努力してると言うくらいの権利はある！」なんて思ってたんですが、時間が経つにつれその言葉の真意というか、自分の夢や目標のためにがんばるのは当たり前のことで、そこで「自分はがんばってる！努力してる！」なんて酔いしれてるようではた

だの甘えというか、それこそ本当の努力に至っていない証拠で、側から見て「この人本当に努力してるなぁ」と感じる人ほど「いやいや、まだまだです！」と謙虚な姿勢で一心不乱に努力を重ねているということがわかってきました。「がんばります！」「努力します！」とは言えても、「がんばってます！」「努力してます！」というのは自分で判断することではないと母に教えられました。

二つ目は結婚後長男が生まれ、両親が名古屋に来た時です。妻にはおめでとうと一緒に、出産や育児への労いの言葉をかけていたと思うのですが、僕にはおめでとうと一緒に『お父さんになれて良かったね』と言ってくれました。いろんな方にお祝いの言葉をいただきましたがそんな言葉は初めてでした。「実の親でこその目線なんだろうな」と思いましたが、母自身が母親になれたことを心から「よかった！」と思っているからこそ、息子が父親になったことを喜び、そんな言葉で祝福してくれたのだと思います。誰しもがなりたいと思ってなれるものではないこと、出産をがんばった妻をはじめいろんな方達のおかげでそこに立てたこと、生まれてきてくれた息子がその使命を与えてくれたこと。お祝いしてもらうどころか本当は感謝すべきことなんだと教えてもらいました。「お父さんになれて…」と言われましたが、あの頃はまだまだスタート地点で、今なお父親になるためにいろんな方たちのサポートを受けながら、息子達に様々なことを教えてもらってる毎日です。

物理的に親元を離れたのは早かった僕ですが、経済的には長々と両親のお世話になりました。大学卒業後北京へ３年間留学、その後名古屋に来て鍼灸の学校へさらに3年。セントラルたなか鍼灸院で働きはじめた30歳の春に、やっと自立した生活を始めました。子ども４人とも大学を卒業させ、さらに僕みたいな息子がいたのですから、両親には感謝しかありませんし本当に尊敬します。結婚して息子達が生まれ、改めて両親の凄さを痛感すると共に、恩送りをしたいと思うものの息子達に同じことをやってあげられるかというと本当に難しいことだと思います。正直なところ「自立した生活を始めた」と言いましたが、結婚後は妻のご両親などに様々なサポートを受けながら、なんとか生活させてもらってると言う感じです…。

なんとなく自分も年齢を重ね、少しずつ両親の体調を気にするようになり、身近なところやメディアから流れてくる「介護」や「親との別れ」といった言葉に反応するようになりました。まだまだ実感を伴うものではありませんが、実際にあとどれくらい、父や母と顔を合わせながら同じ時間、同じ空間を過ごすことができるのでしょう。年に1回、3日ほど帰省できたとして72時間。父が90まで生きたとして残り15年。ざっと計算すると1,080時間、45日。約1ヶ月半しかありません。そこから睡眠時間を引いたら？実際に帰省できるのは何年に1回？両親がいつまで足腰が達者で、いつまで認知機能が維持される？病気が見つかったり事故に遭ったりしてもっと早くに亡くなったら…？現在ではスマホ一つでテレビ電話ができますし、数年かけながら少しずつ少しずつという変化なのかもしれませんが、凝集すると親と一緒に過ごせる残り時間は500時間、約20日くらいしか残されてないのかもしれません。

限られた時間の中で少しでも孝行をしなければと思うものの、何もできていないのが現状です。可能な限り日頃から感謝の気持ちを伝えるように心がけたり、時々は孫達の様子を伝えようと一緒にテレビ電話をしたり、それこそ数年に一度の里帰りで元気な顔を見せるくらいがやっとという感じです。親元を離れ30年近く経ちますが、今でも季節の野菜や手料理を送ってくれたり、「体調は大丈夫か？」と気にしてくれたり、いくつになっても親にとっては子どもなんだなぁと、ありがたいことに感じさせてくれます。

家族にはいろんな形があって、それこそ親元を巣立ち離れ離れで生活してる人たちなんてたくさんいるでしょうし、さまざまな理由で家族としてのつながりが壊れてしまってたり、若くして親を亡くしたり、逆に幼子を先に見送ったり…。そう思うと自分はなんて恵まれた環境にいるのだろうと痛感します。だからこそ今のうちにしかできないこと、会いに行ける両親や家族がいる、帰るべき故郷がある、そういう当たり前だと思いがちなことに感謝しつつ、悔いの残らないような生き方を探していきたいと思います。

最後に家族6人が揃ったのは9年前、福岡で行われた妹の結婚式でした。長女に会ったのはそれが最後。二女には7年前帰省した際。妹とは家族揃って名古屋に遊びに来てくれた4年前。そして両親とは昨年のゴールデンウィークに帰省して会ったのが数年振りでした。こんな家族なので密かに家族写真を撮ることが僕の夢になっています。できれば家族6人で、そしてその後4人の配偶者と孫たちみんなで、総勢18人の集合写真を撮りたいと願ってます。

日々を懸命に生き、そして時折ふるさとを想ふ。遠くから自分のことを支えてくれている存在に、ただただ感謝です。

長々と、個人的な駄文にお付き合いいただきありがとうございました（–__–；）